

A TREASURY OF WORLD LITERATURE



新集 世界の文学

25

中央公論社

新集 世界の文学 25

©1970

パレス

訳者 伊吹 武彦

昭和45年 5月25日 初版印刷

昭和45年 6月 5日 初版発行

発行者 山 越

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
型函 加藤製函印刷株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論

東京都中央区京橋2丁目1番
電話(561)5921(代) 振替東京

目次

自我礼拝

第一部 蛮族の眼の下

第二部 自由人

第三部 ペレニスの園

解説

年譜

399

374

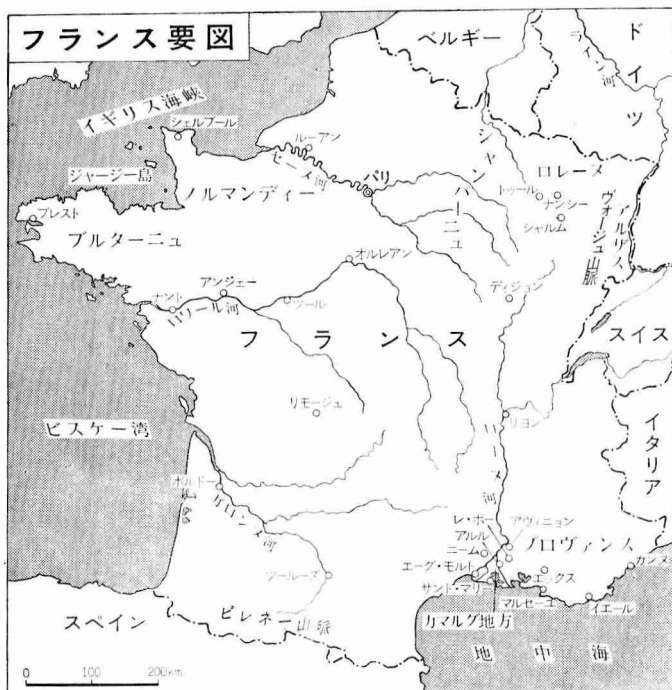
263

117

23

自我礼拝

フランス要図



観念小説三部作の検討

ポール・ブルジェ氏に*

この本——『蛮族の眼の下』——は、出版後六週間を経ても一般の知るところとならなかった。そして専門家の大部分は、これを理解しがたい不快な作品と評していた。そのとき君は、君の権威と友情をこの本にもたらし*
てくれたのである。そして今日にいたるまで、その余恵を与え続けてくれたのである。君は僕のために、作家が読者を探し求めるあの苦難の時を数ヵ年短縮してくれた。また君があえてこの文章の欠点を問うことなく、むしろその含む興味ある試みを強調してくれたあの懇切な理解によって、僕の仕事は僕自身にとっていっそう楽しいものになったといえよう。

ああ、僕たちがイエールに過したこよなくなつかしいあの数日！ 君は『女ごころ』を書いていたので、僕

たちはただ遊蕩児カザルや、ボワイヤンヌや、あの温順なチエール夫人（ともに『女ごころ』の主要人物）のこと、また当時僕の欲び*
だったうら若いベレニスや、あの愚劣なシャルル・マルタン（本書第三部『ベレニ』のほか念頭にはなかった。これらの人物は僕たちを存分に楽しませてくれた。なお君は、生活を隅々まで按配する無類の術、つまり、宿屋の主人を聡明にし、うるさい奴らを尻込みさせる術を心得ている。旅先で僕を悲しませる一つの考え、世間にはずいぶん馬・鹿の類がいるのに、食用に適するのはまず子牛と牛と羊だけであるのは情けない、という考えが、そのときばかりは食卓に付いてただの一度も起こったことがないほどである。

ブルジェ君、こうして君は、感嘆の対象を愛するという、青年にとつての無上の歓びを与えてくれたのである。

なお君が当代の思想家として、それぞれの精神にとつて適切な方法は何か、それに関する最も明確な見解と、

* フランスの小説家（一八五二—一九三五）。パレスより十歳年長であるがきわめて親交があり、ともに伝統主義者として盛名を博した。

* 一八八八年、『デバ』紙に掲載されたブルジェの批評を指す。

それを論じる最も強烈な趣味を持つてゐることを付け加えれば、僕がこの小論を、——『蛮族の眼の下』『自由人』『ペレニスの園』のなかに展開された「自我」礼拝の理論が生む数個の問題を検討しようとするこの小論を、あえて君に捧げる理由は十二分に説明されるであらう。

検 討

なるほど、最も好意的な批評家の批評を読んでみても、一八八八年から九一年まで、長い間隔を置いて発表されたこの三部作は、十分にその意をつくしていないもののようにある。批評家たちはもっぱら部分部分を褒め、あるいは批判したが、しかし重要なのは前後の關係であり、論理的全体であり、体系なのである。そこで、最も多かった批評に対する答えとして、作の検討を行なつたのがすなわちこれである。しかし読んでくださる方々に、一人でも不快の念をいだかせてはとの考慮から、私は討論の形式によらず、叙述形式を採つて行きたいと思う。

そもそもこの三部作に何を求めるべきであるか。

このなかに心理解剖を採してはならない。少なくとも、これはテーム氏（一八二八—一八九三。フランスの哲学者。自然科学流、実験的方法を人間心理に適用しようとした）流、ブールジェ氏流の心理解剖ではない。テーム氏やブール

ジェ氏は、木の葉が茎や根や、その生育する土壌やそれを包む空気によって、いかに養われるかを示す植物学者の方法によってやって行く。これら本格的な心理解剖家は、あらゆる人間の感動の原因系列をその根本にまでさかのぼろうとする。しかも、その物語る特殊な場合や挿話から、一般的法則を引き出すのである。ところがこの作品は、それと正反対に、『キリストのまねび』(トマス・著書)やダンテの『新生』に無限の満足を感じている人間、これと目ざす心境の、微細な、感動的な、伝染力ある描写を与えることに分析の苦心は終わる、と考えている人間によって書かれたのである。

この方法の最も大きな欠点は、その描く感情が、その感情を体得していない人々には不可解に終わるということである。ある人物の特異な性格が、父祖の習慣や、環境の刺激とそれへの反撥によって準備されたものだと言明するのは心理解剖学の手引きの橋で、いかに予備知識のない読者でも、作者の招くきわめて特殊な領域へ、この橋からはいって行くことが出来るのである。もし立派な心理解剖家が、注解によって橋渡しをしてくれなかったとしたら、たとえば『まねび』のような、その情熱も

倦怠もわれわれのあずかり知らない書物のなかに、何を理解することが出来るであろう。それでもなお、敬虔な修道士の密室というものは、カトリック信者として生まれた読者にとっては、決して窺知すべからざる場所ではない。どれほど神秘主義に縁遠い者でも、その含む感情についてはおぼろげながらわかる気がするのである。ところが、気位が高く、洗練され、二十歳のころ、はげしいパリの生存競争裡に投げ出されて、しかも身に寸鉄も帯びない一介の文人の生活や感情が、普通人にどうしてうかがい得よう。突きつめていえば、知的なフランス青年の修業時代五、六年のモノグラフィを試みたこの本のなかに、どうして英国人やノルウェー人やロシア人が、自分の姿を認め得よう。

このとおり、私は自分の採った方法の難点に眼をおおるものではない。数年間、非難的となった難解さは、決して文章のたどたどしいためではなく、思想の未熟なためでもない。まったく心理的説明が欠けていたからである。しかし、感動のおもむくままに筆をとっていたとき、私としては、自分のうちに生起する現象の諸条件を決定し描写するほかに仕方がなかった。どうして説明の余

裕がある。

そのうえ、かりに注解が必要であるとすれば、それは新聞の論説か座談ですればよいことである。またこの作が出た当時、難解と称された点も、今では問題にする者もないことは、あえてここに記してはばからない。最後にこの本のなかには、——これが私の心底であるが、——専門的要素をいっさい交えなかった。なぜなら、私の考えでは、この本はただ誠実さを歎んでそれ以上を求めず、いかに特異であろうとも、およそ魂の危機に對して、熱情を感じる人々だけに勧めるものだからである。

もっともこの観念論は、伝染的な感動をもって表現されている。精神問題に関するフランス人的趣味を昔ながらに持っている人々は、そこに劇的興味を感じ得るであらう。私は熱情的観念論を書いたのである。世間には歴史小説もあればバリ風俗小説もある。したがって、多くのものに、思想に遊ぶこと以外おそらくいっさいのものに倦きた世代が、そろそろ形而上学小説を試みてもよいわけである。

これは心靈的回想記である。また、熱烈な祈りによって点綴されたスコラ学派の論考と同じく一種の射禱（リット）（カト）

タ用語で、あふれ出るような熱烈な祈り）でもある。

このモノグラフィーには三重の興味がある。

第一、多くの人々がみずから感じてはいても、自分だけでは十分意識できない感情の明確な方式を与えている。

第二、今でもたくさんいるが、私の予感では、現在、高等中学校にいる者の間に、ますますその数を増そうとするある型の青年についての資料である。模倣者が、引きのぼしたり歪めたりしなければ、この本はいずれ文献として参照されることになる。

第三、しかしとくに意を用いた第三の点は、このモノグラフィーが教訓であるということである。あまり高遠な目的を掲げるのは危険であるが、いかなければ読者までどこまでも迷わせることになる。私はある外国詩人の述べた大望を、瞬時も忘れたことはない。「偉大な詩はすべて教訓である。余は師と見なされるか、しからずんば無視されたい」

ここで、この本の内容をなす理論、「自我礼拝」についての論議を始めたい。それからあとに、いわゆる私の「懷疑論」について釈明する必要がある。

一 自我礼拝

イ——自我礼拝の根拠

貸本屋の本から借りてきたきまり文句を繰り返さずに、自力で物を考えようと決意した現代人がいだき得る世界観を小説化しよう、それにはまず「自我」の研究から始めるべきだと私は信じたのである。その理由は一八九〇年十二月、「実習劇場」(フランスの国立音楽演習劇場に付属する劇場)での講演に述べておいた。この議論は未発表であるが、いま詳細に繰り返す必要はあるまいと思う。われわれの道徳、われわれの宗教、われわれの国家観はすでに崩壊している。そういうものから生活原理を借りることは不可能である。ある指導者がふたたび与えてくれるまでは、われわれは唯一の実在、すなわち「自我」にたよるべきだ、と私は認めたのである。それが『蛮族の眼の下』第一章(かなり不十分ではあるが)の結論である。

この断定は、世間いたるところに見られるものであるから、豊かな発展性を持ち得ないといえるかもしれない。しかし、それに返答せよとならば私の答えはこうである。そもそも思想というものは、われわれがそれを論理機構のなかに置く場合の地位によって、はじめて重要性和意味を生じるものである。私がこの作のなかで、「自我」礼拝に劇的価値を与えようと試みると同時に、それは私の思想の叙述のなかで優越的性格を受けるにいたったのである。

もつともエゴイズムとかエゴチズムとか「自我」とかはすでに検討済みである。多数の青年たちが道徳的混乱に陥って、この救いの船を熱烈に歓迎したとき、反対の声が、エゴイズムを攻撃する永遠の叫びがおこった。しかしこの騒ぎは笑止である。少しでも教養のある人間なら、とくの昔に心得ているはずの初歩的知識を、またしても繰り返さねばならないのはじつに嘆かわしい。一八〇七年、サン・シモン(一七六〇—一八二五)はこういう卓見を吐いている。「道徳家が人間にエゴイズムを禁じ愛国主義を認めるのは矛盾している。愛国主義は国民的利己主義にはかならない。この種の利己主義は個人的利

己主義が個人相互の間に犯さしめると同種の不正を、国家相互の間に犯さしめる」と。実際サン・シモンとともにすべての思想家は、有機体の保存がエゴイズムに依ることを認めている。望み得る最良の道は、個人の利害と全体の利害とが同一方向をとるよう人間の利害を組織するにある。人類の原始時代は、各個人がその利害を組織しなかったから、個人的利己主義が最もはびこった時代であるが、それと同様、世間に出て、自分を支配すべき師、「公理、宗教、人の王者」を見いだし得ない真摯な青年たちは、まず「自我」の欲求に仕えねばならない。きつかけは存在することにある。さて相当に強くなり、自己の魂を所有し得るに至ったと感じたならば、そのときこそ人類全体を眺め、共同の道を発見してそこに調和すべきである。それが『ペレニスの園』の愛の日々に、私の心を動かした配慮だった。

とにかく私はこれから、小三部作の標題のみを注意深く検討することによって、確実に、しかも簡潔に、三部作の本質と構成に触れようと思う。

ロ 『蛮族の眼の下』の主題

この蛮族[、]という言葉を「俗物」「俗人」の意にとるのは大間違いである。ある人たちは最初からこの点で勘違いをした。しかしこういう同義語を当てはめるのは、私の考えていることと正反対である。私は人間を、芸術品を作る芸術家と非芸術家とに分けるような、乱暴な専門意識は持っていない。フィリップが「蛮族の眼の下」に生活することを嘆くのは、無教養な人たちや商人に圧迫を感じるからではない。彼の悲しみは、人生に対して、彼のいまだく夢とは反対の夢を持つ人々の間に生きるという点にある。たとえそれが洗練された教養人であっても、彼には異邦人であり敵である。

同じ意味でギリシア人は、ギリシア本国以外の人たちをことごとく蛮族と見た。異邦人に接すると、その文化程度がいかに高くても、自国の文化を固守するギリシア人は、生活上やむなく心的祖国を異にする人々と交わらねばならない青年の感じるのと同じ憎悪を感じたのである。

一個の感性に反対する人の、心の高下は問うところでない。繊弱な、ためらいがちな、おのれを求めつつある「自我」の發展を、はばみ歪める異邦人、その圧迫下に青年が自己の運命を破り、生きる欲びにもめぐり会わない、その蛮族を私は憎むのである。

こうして、蛮族と自我と、この二つの言葉は、対立されるとき十分その意味を明らかにする。われわれの「自我」とは、われわれの有機体が環境の刺激に対し、「蛮族」の妨害下に反抗するその仕方である。

私はこの本を構成するに当たって、右の対立關係を考慮に入れた。この新機軸は、おそらく不毛のままにとどまることはないであろう。「照応篇」というのは外側から拾った事実を物語るものである。ついで、それに対応する部分のなかに、同じ事実を、内側から感じたままに示してある。一方はわれわれの心のさまについて「蛮族」の描く映像、もう一方は同じ心のさまをわれわれが意識した姿である。そしてこの本全体は、自分の姿どおりに歪めようとする「蛮族」のただなかで、身を守り通そうとするフィリップの闘争なのである。

事実、われわれの「自我」は不動のものではない。わ

れわれは「自我」を日々に守り、日々に創造しなければならぬ。この本は、その二つの真理の上に建てられているのである。「自我」礼拝とは自己を全的に承認することではない。われわれが熱烈なひたむきな愛情をそぐこの倫理は、その奉仕者に不断的の努力を要求する。それは剪定と拡充とによって行なわれる一種の修練である。まずわれわれのなから、生活が絶えず導き入れるあらゆる異物を清め去り、次に新しく添加しなければならぬ。はいったい何を添加するのか。それはすべて自我と同一なもの、同化し得べきもの。明瞭にいえば、自我が本能の力に無抵抗に身を委ねるとき、自我に付着してくるいっさいのものである。

ブルードン（一八〇九〜六五。フランスの社会主義経済学者、無政府主義者）は少年時代を回想している。「自我とは私が手をもって触れ、眼をもつて見得るいっさい、何かに役立ち得るいっさいであり、非我とは自我をそこない、自我に抵抗するいっさいのものであった」青年の本能に駆り立てられるすべての情熱家にとって、世界はまさにこのような単純さをもつて現われるのである。ブルゴーニュ州の草原にまろび戯れた村童ブルードンが、太陽と大氣を楽しみ得なかったのは、

あらゆる幸福に飢えて色蒼ざめたわれわれ都会の青年が、大バリに向かつて開かれた狭い部屋のなかでバルザックやフィヒテを楽しみ得なかったのと同じである。彼が物質界について述べていることを、事物の精神的な姿に当てはめれば、それがすなわち『蛮族の眼の下』におけるフィリップの心境となる。「蛮族」すなわち非我、すなわち自我を害し、自我に抵抗するいっさいのものである。

この定義は『自由人』と『ペレニスの園』で明瞭になるが、第一部ではまだ混沌としている。それは「自我」の生誕ということが、すべて物の起原に関する問題と同様、われわれの頭に、はっきりつかみ得ないからである。私の頭に残っている漠然たる記憶は、曖昧な象徴形式によらなければ表現し得なかったのである。『蛮族』の初めの数年、いっさいの経験に先立って師から受けた暗澹たる教育を意味する『システム老人』、鏡上の接吻にはかならず『初恋』、象牙の塔にこもって「蛮族」に襲われる『アテナ』は、私の感性の底深くを誠実に描写したものである。……しばらく待ってください、ミラノを訪れ、ダ・ヴィンチの微笑の前に「自我」は高度の教育を受け、「蛮族」はいっそうひろく理解されて、敵とな

り、反対者、分割者となる。それが『自由人』であり、『ペレニス』である。第一部は、繰り返している、連作の出発点であり根底であって、一人の青年がまず書物のただなかに、次いで初めて知るバリの冷酷さのなかに、意識生活に向かつて眼覚めるさまを描くにどめてある。教育がおおいかにぶせたあく、生活が刻々に浴びせるあくの下で、「自我」を征服し防衛しようともがいている二十歳の青年は数多い。私は寄せられた共鳴によってそのことを確かめた。しかし、彼らのおのずからなる感性を讀めるにとどまらず、感性を陶冶し、「自由人」となることを、おのれを掌中に握る人間となることを提議したとき、私はこの種の青年がいよいよ数多いことを知ったのである。

ハ——『自由人』の主題

それまで、存在し得るか否かさえ知らなかった「自我」は、ここに自己を完成し拡充する。第二部は、燃えかつ醒めよという、みづから課した掟にそうために、フィリップが設定した体験、実践した宗教を詳述したもの

である。

断固、感激に到達する手段として、あの強力なロヨラの方法を復興したことを私はみずから喜びとしている。

この心的機制は、身心相関についての十分な知識によって補足すれば（私はこの点カバニス（一七五七—一八〇八。フ者。生理学にもとづく）に従ったが、将来は催眠術師を利用する人もあるだろう）、心の動きを楽しみ究める人に、

いかばかり貢献し得るであろう。これは全然意力によって成った本、公式集のように無味乾燥には見えるが、実際にははなはだ高邁な書物である。私はこの書によって、かつて本能的にいだいた計画を強化し、それと同時に高めたのである。ミラノを訪れ、ダ・ヴィンチの前で、フィリップは「蛮族」観を純化し、ロレーヌ州を訪れて「自我」観を純化した。

初めから読者の寛容をいただいたロレーヌ州に関する章と、全巻を通じ私にとっておそらく最も貴重なヴェネチアに関する二章とは、本筋を離れた添え物ではない。それは、フィリップが永遠なるものの一瞬として自己を理解したその間の消息を物語っている。真摯な慎ましやかさをもって彼は自己の起原を再発見し、将来の可能性

をうかがい見た。「自我」を集団との関係において探究することによって、フィリップは「自我」の真諦をつかんだ。彼は「自我」を、本能がみずからを実現するがために払う努力と観じたのである。彼はまた、自分が過去に伝統を持たず、一代限りの仕事に没頭して、いたずらに蠢動するゆえに苦しみつつあることを悟ったのである。

こうして、「自我」は、拡充することによって、「無意識」のなかに溶け入ろうとする。そこに消滅するのではなく、人類の、普遍的生命の、汲めどもつきぬ力によって拡大するのである。そこから第三部『ペレニスの園』が生まれる。これは愛の理論を述べたもので、ジョーベンハウエルに囁々の非難を浴びせ、彼のなかにわが十八世紀の精神を認めなかったフランスの文筆生産業者は、もしこの書物のなかにハルトマンの学説が行動化されて

* イエズ会の創始者（一四九一—一五五六）。『心靈修業』という一書を著わし、宗教的真理に到達する手段を教えた。たとえは瞑然して天国の情景を想い、そこに宗教的興奮を感じるような一種の説法を説いている。

** ドイツの哲学者（一八四二—一九〇六）。無意識が絶対唯一の存在であり、これに従うことがすなわち人生の目的であるとする無意識哲学を創めた。『ペレニスの園』では結局この哲理が行動化されているのである。

いることを看破したら、議論の目先を変えることが出来るであらう。

ニ——『ベレニスの園』の主題

しかしこの作の論理が、思想の連絡と同様に厳密であることを指摘するのも無駄ではあるまい……。

『蛮族の眼の下』の最後で、人間との接触到失望したフィリップは、自分を導いてくれる友を見いだそうと願っていた。夢は必ず割引して考えなければならぬ。しかし少なくとも彼は、方法的な、実り多い心靈修業において、思索と情感を共にする一人の仲間を発見した。それがシモン、問題のサン・ジェルマンのシモンである。しかしこの孤独と、観想的ディレクタンチスムと多くの瑣末な体験に疲れたフィリップは、『自由人』の最後の数ページで行動の姿勢をとる。『ベレニスの園』は選挙戦を物語ったものである。

結局一つのものである民衆とベレニスとから、フィリップが何を学んだかは、あえて再説する必要はない。私はこの三部作を貫く首尾一貫した精神を強調しようとする。

るのであって、作品内容の展開をあとづけるのではない。私は以前から敏捷な筆致、瀟洒な要約体を好んでいるので、それをよけいな注解によってそこなう気がしないのである。そこで、ベレニスとは乙女なのか、民衆の精神なのか、それとも「無意識」なのかと惑う人々には、『蛮族』中のかんどころを参照していただくにとどめたい。

冒頭には青年をめぐる、一人の若い女が現われる。これはむしろ、男女二つの要素を持った魂の物語なのではないか。それともまた、おのれを守る「自我」のかたわら、おのれを知りおのれを確立しようとする「自我」のかたわらに、年若く多感な人間にあってはきわめて強烈な気まぐれを、遊びごころを、放浪癖を表わしたものはあるまいか。何と見ても差支えはない。ただ私の知っているのは、心の乱れがこの複雑さを与えたのであって、当時私はそこにいささかの曖昧さも感じてはいなかったということである。これは感性の変貌に関する論理的探究ではない。心底深く感じた視像や感動を無修正のまま再現したものである。これと同様に、最も感動すべき詩、『新生』の中で、ペアトリーチェは果たして恋の